＜研究会報告＞

第41回 例 会 報 告

1998年，6月7日（土）に，本会の第41回例会が筑波大学学校教育部において行われた。例会で行われた唐木清志氏の講演と，山口泰宏氏の報告の要旨は以下の通りである。

アメリカにおける『コミュニティー・サービス学習』の構造
ーミネソタ州を事例としてー

唐 木 清 志*

アメリカ合衆国は，伝統的に「市民参加（citizen participation）」を重視してきた国である。そのようなアメリカで，1970年代，「参加」学習論が成立した。黒人運動・学生運動・反戦運動（1960年代），そして公共利益運動（1970年代）が活発となる中で，学校教育の領域でも，その「参加」の精神をカリキュラムの中で活かしていこうとする動きが盛んとなったのである。

ところが，そのような「参加」学習論も，アメリカ社会の保守化傾向と学校教育における「基礎に帰れ（back-to-basic）」運動の流れの中で，その性格を大きく変えることとなる。1970年代の「参加」学習論で目標とされた「理想とすべき市民像」が「エリートに対抗して，自らの権利を主張する批判的な市民」であるとするなら，1980・90年代のそれは「個人的な出来事よりも，公的な出来事に関心をもつ公的市民」と変化していくのである。こうした動きの中で，1980年代の教育改革以降，アメリカでは，「コミュニティ・サービス学習（community service-learning）」が注目されるようになった。そして，1990年に「コミュニティサービス法（National and Commuity Service Act of 1990）」が制定されることで，「コミュニティ・サービス学習」は全国的な広がりを見せるようになるのである。

ミネソタ州は，「コミュニティ・サービス学習」に早くから取り組んだ州の一つである。アメリカでも指折りの教育州の一つであるミネソタでは，他州に先立ち，1992年に『青年のコミュニティサービスためのモデル的な学習結果（Model Learning Outcomes for the Youth CommunityService）』というプログラムを開発する。このモデルに基づきながら，以後，ミネソタではさまざまな「コミュニティ・サービス学習」に関するプログラムが県や学校のレベルで開発された。その内の一つが，今回紹介させていただいた，ウェイズカミドルスクールの実践である。ディケンズの小説にちなんで「クリスマスキャロル」と名付けられたその実践では，地域住民のホームレスに対する関心を高めるために，12月のある夜，子どもたちが実際にホームレスの体験をする。

「コミュニティ・サービス学習」は極めて学際的な学習である。いわゆる「クロスカリキュラム」に基づく実践である。また，地域の生の素材を教材とするために，教師および学校のカリキュラム開発能力が問われてくる。これらの点を考えると，例えば，「総合的な学習」に「コミュニティ・サービス学習」の方法論は大きな示唆を与えるのではないだろうか。

*静岡大学

社会科教諭としての教科・教科外指導の取り組み

山口泰宏*

6月6日に行われた例会において発表させていただいた内容は3つの事業に関わる実践報告である。以下，要点を報告したい。

(1) 彩の国埼玉未来に生きる学力育成研究(公民)の実践

本校では「未来に生きる学力」の育成のために基礎学力の定着と学習意欲・好奇心の喚起にポイントを定めて実践を行った。私が担当する１年生「現代社会」では生徒が自分の意見をまとめる機会を多く作れるように心がけた。また定期考査問題が「授業のねらい」と「評価の観点」を正しく反映しているか，知識理解の偏重に陥っていないか，自己分析を行った。２年生の「世界史Ｂ」においてはグループ学習として「歴史・文化を学ぶ海外旅行計画」を発表して相互評価を行わせた。ここでは自分の意見を発表する訓練が多いに不足していたことを実感した。

(2) 三郷市次代を担う若者の船［三郷市教委］

これは三郷市内在住・在校の13～19歳の学生・生徒を小笠原父島へ派遣する市教委の事業である。事前研修(12月～３月の日曜・祝日に10回前後)として「環境学習」を重視しており，95年度から97年度まで私が担当した。身近な環境問題から大きな環境問題までが関連し合うことを確認した上で「三郷市内空きカンポイ捨てＭａｐ」を作成したり「サントコ新聞（三郷はこんなトコだ新聞)」を発行したりした。研修生の活発な活動により，三郷の地域性がよくあらわれた環境学習が行えたと考えているが，市側が考えていた「環境(問題)学習」との食い違いが大きかったようで難しさを感じた。

(3) 彩の国インターリンクス事業－マレーシアの高校生との交流－

本校では県のインターリンクス事業の師弟を受けてマレーシア・ペナン州の高校と交流を続けている。私が国際理解教育推進委員としてこの事業に関わったのは平成８・９・10年度であるが，地理歴史科の専門性から生徒派遣・受け入れの際の事前学習などを任されることが多い。マレーシアは主にマレー系・中国系・インド系からなる多民族国家であり，従ってイスラム教・道教(仏教)・ヒンドゥー教が混在している。このような同国の環境は本校生の異文化理解のためのフィールドとして絶好の条件を有していると考えている。

*埼玉県立三郷高等学校